JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	プロトタイピングを併用するCBPR拠点の検討
Author(s)	前波，晴彦; 三浦，政司
Citation	年次学術大会講演要旨集，30: 96-97
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13234
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

１Ｄ０２

プロトタイピングを併用する CBPR 拠点の検討

○前波晴彦（鳥取大学）
三浦政司（鳥取大学）

1.　背景

高等教育施策や「地方創生」等の地域振興背策を背景に、地方大学では多くの社会貢献・地域貢献活動もしくは立地地域を対象とした研究活動が推進されている。しかしこうした活動においては個別課題への随時対応による業務負担の増加や特定教員に対するエフォートの集中、研究者の実績評価や研究業績とのミスマッチ等の課題が散見されており、必ずしも研究者コミュニティの充分な理解、積極的な参画を得られているとはいえない。したがって今後こうした活動を持続的に推進していくためには研究活動との整合性に留意した体系的な取り組みが求められる。

一方、研究者コミュニティの側に目を転じると、各種研究ファンド等によって学際的研究への優先的な資源配分が進められており研究資金を得るためには従来とは異なる学際的研究チームを構成する必要に迫られるケースが増加している。同時に研究成果を定量的に評価しようとする傾向は高まる一方であり、個々の研究者はこれらの潮流に対応することを求められている。

以上のことから、１）「地域課題」への対応、２）学際研究、３）定量評価に耐える研究アウトプットを同時に満足する研究活動支援が必要となりつつある。「CBPR(Community-based Participatory Research)拠点設置ワーキンググループ」(以下「当 WG」という)は以上のような背景と問題意識のもと、地方大学における社会貢献・地域貢献とそれに基づく研究活動を推進し、地域コミュニティと研究者コミュニティ双方にとって有益な枠組みを提案 することを目的として鳥取大学「地(知)の拠点整備事業」の支援を得て設置された。

本発表ではプロトタイピングを併用しつつ地域の課題抽出から解決までを実施する新たな拠点の構想を報告する。

2.　先行事例の検討と現地調査

当 WG ではサイエンスショップ、フューチャーセンター、d.school 等の先行事例を検討すると同時に以下の拠点・施設について調査を行った。

- 大阪大学サイエンスショップ
- 神戸大学サイエンスショップ
- 東京大学 i.school
- Stanford University Institute of Design at Stanford
- Wilfrid Laurier University Centre for Community Research Learning and Action
- Ryerson University
- University of Waterloo Center for Career Action

3.　鳥取大学 CBPR 拠点（仮称）の構想

鳥取大学 CBPR 拠点（仮称）は「デザイン思考」を導入した地域課題研究を志向した全学センターとして構想されている。同時に、鳥取大学 CBPR センター（仮称）では学内ファンドを運用することで立地地域をフィールドとする学内研究者間の学際研究支援も実施する。

CBPR は地域の住民が抱える問題を解決するための研究に、地域住民自自身が参加し、専門家らと協同で活動する研究形態・研究方法とされる(Israel et al.,2001)。こうした研究携帯は従来 AR(Acton Research)や CBR(Community-Based Research) と呼ばれてきたが、地域に密着した問題を対象とすること、地域住民の積極的な参加を含むことをより明確にする形で CBPR として整理された(Minkler and Wallerstein, 2008)。

「デザイン思考」は米国のデザインコンサルタント企業 IDEO におけるプロダクトデザインのノウハウを基盤とした問題解決のプロセスや考え方をまとめた手法であり(Brown,2009)、導入事例としてはスタンフォード大学の Institute of Design at Stanford(d.school) が著名である。国内では東京大学 i.school や九州大学 QREC などの組織・施設が先導的な例である。

また、従来、学外から持ち込まれた種々の課題について、学内のリソースで解決できない場合には、それ以降の対応が必ずしも充分になされてこなかった。しかし本来、課題解決に資する研究成

果は世界中に点在しており、大学所属の研究者が保有する研究者ネットワークを活用することで、そうした研究成果にアクセスすることが可能である。こうした活動は仲介した大学に直接的・短期的なメリットこそもたらさないかもしれないが、課題解決に資する人材やネットワークの紹介は課題を持ち込む自治体や企業にとって有為なサービスであり、仲介役の大学に対する信頼は深まると考えられる。そこで鳥取大学 CBPR センター（仮称）は、産学・地域連携推進機構等の学内組織と連携し、立地地域における課題と他地域の機関とのマッチングを積極的に行い、研究者ネットワークへのゲートウェイ機能を果たすことで地域の課題解決に資する。

4. 地域課題研究にプロトタイピングを活用する意義

鳥取大学 CBPR 拠点では､関係者間の対話を促す場の設定と同時にプロトタイピングを活用した対話プロセスの実施を想定している。

ある一定の地理的範囲内における課題群は一般に「地域課題」と呼ばれる。「地域課題」の解決は「地方創生」における有力なテーマであり、大学組織の関与も期待されている（文部科学省 2014)。一方で、従来「地域課題」として扱われてきたものは特定事業者の課題である場合が多く含まれており、こうした特定課題の解決が地域全体の利益に資するのかどうかについて十分な検討がなされない場合も少なくない。

個別の事象や課題から地域全体に資する課題群を顕在化させるためには、専門家同士および非専門家を含む地域住民との対話・交流を促進する仕組みや議論を集約する方法論が必要である。また地域ニーズの発掘や問題解決にあたっては研究者と地域住民が繰り返し対話を行いながら試行錯誤を行うことが必須であり、その際には専門家と非専門家が協働するために議論の途中経過を可視化し共有することが求められる。近年急速に発達しているラピッド・プロトタイピングはこうした用途に適した手法であり、専門家―非専門家間の知識ギャップを低減し、対話を成立させる際に有効なツールになり得る。

プロトタイピングを併用する対話により課題の抽出過程だけではなく、課題解決手法の設計段階の早い段階から関係者のフィードバックを得ることができると期待される。鳥取大学工学部附属ものづくり教育実践センターでは従来から地域企業との連携によるものづくり教育を実施しており、センターが保有する設備や知見にもとづくプロトタイピングが可能である。

5. 参考文献

[1] Israel, A., Schulz, J., Parker, A., 2010, Community-based participatory research: policy recommendations for promoting a partnership approach in health research, *Education for Health* vol.14.

[2] Minkler, M., Wallerstein, N., 2008, *Community Based Participatory Research for Health: From Process to Outcomes,* Jossey-Bass.

[3] 文部科学省, 2014, 「文部科学省における地方大学活性化への取組」, まち・ひと・しごと創生本部基本政策検討チーム第 2 回会議資料.